

# 2004年度鳴門市人権地域フォーラム

## テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2004年9月9日(水)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A(徳島県教育委員会派遣社会教育主事)

パネリスト B(山川町人権課課長補佐)

C(部落解放同盟鳴門ブロック協議会)

D(大阪教育大学1年)

### 《コーディネーター A》

#### 啓発ビデオ【峠を越えて ～魂の同和教育実践者・森口健司～】の紹介とビデオに寄せる思い

皆さん、こんにちは。Aと申します。昨年度は、土成町と美郷村、今年4月からは板野町と松茂町で人権啓発を担当させていただいています。

中学校現場で、私は道徳学習、人権・同和問題学習の取り組みを進めていくために、子どもたちが自己をみつめ、仲間とつながっていく、そういう授業実践をめざしてきました。いうなら、授業実践は各教室ごとの実践になっていますが、学年全体、学校全体が良くなっていく中で、子どもたち自身が、自らの思いを生き生きと語り合う授業実践になっていく。その願いの中で、学年全体、学校全体での「全体学習」という取り組みを実践してきました。

特に、板野中学校で13年間仕事をさせていただいた時に体験した取り組みというのは、道徳の全国大会に於いて、板野中学校の子どもたちが取り組んだ授業が、道徳の方向性を変えるきっかけになりました。

今は文部科学省に変わっていますが、当時の文部省が出している中学校の道徳の読み物資料の中に、「人権問題」「差別の問題」に関わるものが一つもありませんでした。そういう中で、「人権問題を生き生きと語る子どもたちが、どうしてこれほどまでに自分を語り仲間とつながっていくのか。道徳の資料の中に、そういういった取り組みが必要ではないか。」という声が沸きおこりました。

私が板野中学校に赴任して2年目、「全日本中学校道徳教育研究大会」が徳島で開催された時、板野中学校の3年生が「特別公開授業」を実施しました。その板野中学校の取り組みがきっかけとなって、私は文部省の「中学生読み物資料作成協力者会議」の委員として、読み物資料の作成にかかわるようになりました。

その中で、文部省から全国に発信された人権の問題に関わる読み物資料が、私の生い立ちに関わる資料があります「スダチの苗木」、それと、私自身の結婚問題も含めて、私の教え子、私の仲間の結婚の問題をもとにして作成した「峠」という資料です。その2つの資料が沖縄から北海道まで全国の中学校の現場に発信されていきました。

その、「スダチの苗木」、「峠」という2つの内容を、これは舞台が京都だったものですから、京都の弥栄中学校という学校の仲間の先生たちが、その地域の人たちと一緒に舞台劇にされました。この舞台劇が京都公会館で3回上演されました。また、香川県讃岐市でも、三重県大山田でも上演されました。

その舞台劇に着目された、啓発ビデオを作っておられる「メディア総合研究所」から、昨年、「啓発ビデオをつくらせてくれんか」というお話をいただきました。昨年度、6月7月8月9月とずっと取材を受けました。

当時結婚したばかりの教え子も、そのビデオに登場しています。また、結婚問題に揺れていた教え子も登場しています。今日、その教え子たちもこの会場に来ております。そういう、私が入り組んできたことと、昨年度籍を置かせていただいた美郷村、土成町での行政職員の研修の場面等も今から観ていただく啓発ビデオ

オに収録されています。

このビデオは、「部落の心を伝えたい」というシリーズの第5作目なんです。私のビデオには、25分の収録の後に、1作目から4作目までのビデオの紹介がされています。第1作目は、大坂の松原更池、ここで生活されている「吉田小百合さん」の生きざまと営み。第2作目は、愛媛県の土居町に住んでおられ、もう90歳を超えられました「江口いとさん」、そのご家族の思いや願いも収録されています。第3作目は、三重県の「松村智広さん」、3年ほど前にこの会場でパネラーとしていろんな思いを語っていただきました。第4作目は、奈良の「清原隆宣さん」、「水平社宣言」を起草した西光万吉の弟の孫にあたる人です。その4作のビデオの紹介も後半にあります。

その25分のビデオを通して、そのビデオに込められた思いや願い、それをどう受け取っていただいたのか、3名のパネラーの方に語っていただき、そして、その思いを重ねて、ビデオを重ねて、フロアの皆さんが様々な思いを語り合う。そういう時間が展開できればと思います。

この営みは、やっぱりひとごとで、私たちの問題になりにくく、一段上に立って「頑張れ頑張れ」という域をなかなか出ません。なかなか自分の問題にならない現実があります。なかなか自分が浮き上がって来ない現実があります。なかなか共感的つながりのできない職場の現実があります。地域社会の現実があります。「私たちに何ができるのか」「何が問われているのか」、そんな思いを、今日ここに集まっていた皆さんと思いきり語り合えて、「今日出会えてよかった」「今日、ここでこんなことを感じる事ができた」そんな時間を皆さんに保証できたらと思います。今から、25分間のビデオを観ていただきます。お願いします。

## ビデオ上映

### 峠を越えて

～魂の同和教育実践者・森口健司～

企画・制作

メディア総合研究所

風楽創作事務所

【講演会の壇上、力強く語りかける森口さんの姿でビデオは始まります。

ゆっくり、ゆっくりと、自らの言葉を確かめるかのように、森口さんは語ります。】

『部落の人は、本当に気の毒や。かわいそうや。だから、ああせないかんのや。こうせないかんのや』という言葉を知った時に、私は、イライラ、イライラ、ムカムカ、ムカムカくるんです。

それは、部落差別をなくすという意味だけと違う。人間が、どんな状態に置かれても、『安心して生きられる社会』を創っていくということです。私たちがどういう状況に置かれても、守られていく社会です。『反差別の生き方』っていうのは、まさに、自分自身が解放されていく、卑屈なものから解放されていくんです。（行政職員研修での語り）

「今、父とも結婚の話ができるようになりました。そんな父には、心から感謝しています。

これから乗り越えなければならない峠も、きっと父と母と姉と、そして、彼と彼の両親とで乗り越えて行けそうです。（麻植郡人権教育研究協議会総会 記念講演での語り）

## 《ナレーション》

あらゆる差別をなくしたい。森口さんは、その果てしない闘いに生涯をかけています。

森口さんは、中学校の教師として、21年間にわたり、全体学習というユニークな同和教育を実践してきました。そこで培われた豊富な体験と、強い信念をもとに、差別解消の道をエネルギーに語り続けます。

【場面は、森口さんの実家の一室です。後ろには、一か月前に亡くなったおじいさんの遺影が、森口さんを見つめています。穏やかな笑顔の向こうに、「今の自分」と「過去の自分」。さまざまな想が見え隠れしています。】

#### 《ナレーション》

**森口さんは、徳島県内の同和地区に生まれ育ちました。部落との出会いは、中学2年の頃だったと言います。**

「彼(中学時代の友人)は言うんですよ。『この差別をなくすには、学校の先生になるのが一番良いと、わたしは思うんじゃ…』とってくれるんです…。でも、『この差別』って言われたときに、全然ピンと来んです。『何のことや?』って言うたら…、『知らなかったん』って…。『わしらは、同和地区に生まれたことになっとるんやで』って…、言われたときに、ハッとするんです。」

#### 《ナレーション》

**森口さんは、その事実をどう受け止めていいのかわかりませんでした。**

【徳島の、森口さんのふるさとの風景が広がります。田植えの終わったばかりの水田は、豊かな自然と、これから実っていく息吹を感じさせます。そして、そこに咲くひまわりは、まるで、森口さんの生き方を現しているかのようです。】

【人を包み込むような、温かいまなざし。しみじみと、大切に語られる一言一言に、「今」に至るまでの、さまざまな葛藤が溢れています。語れなかった。正面から立ち向かえなかった。その思いを知っているからこそ、「今」のこの笑顔がある…。そう感じさせてくれる笑顔です。】

「高校の時、年に一度、同和教育の啓発映画を何の前ぶれもなしに見せられるんです。その映画の何でもない場面で、その映画をちゃかして、強がったように笑っている生徒がいるんです。『誰だろう?』って思ってみたら、同じ中学校から来た同和地区の仲間です。『ああ。あいつも、あいつのクラスの中で、切ない思いをしよるんじゃなあ…』『悔しい思いをしよるんじゃなあ。それで強がって見せるんじゃなあ…』という、その気持ちがすごくわかります。」

「高校での3年間、自分を卑屈にしていた3年間っていうのは、『とにかくここ(自分のふるさと・同和地区)から出る』という思いを強くしていきます。ここ(同和地区)に住んどる以上は、ここの地区を言うたら、そういうまなざしで見られる。『このふるさとをとにかく出る。』私は、本当にそのことしか考えなかったんです。」

#### 《ナレーション》

**森口さんは、ふるさとを離れ、京都の大学に進みます。しかし、差別の現実から、逃れることはできませんでした。**

【場面は、職場である「土成町」の行政職員人権研修に変わります。身体全体で、力いっぱい訴えかける森口さん…。その訴えに引き込まれた参加者の真剣なまなざし、そのまなざしに励まされ、さらに力が入ります。】

『部落問題から逃げる…。』そんな思いから、京都という地を、私は自分の進学先に選んだんです。この『部落問題から逃げよう』として行った、その京都の地で、私を待っていたのは、日常的におこる『差別発言』と『差別事象』です。『差別的な行為』です。そして、京都で出会った人たちは、私を部落の人間と知りませんから、私の前で何のこだわりもなく、何の恐れもなく、差別的な言葉を吐きます。差別的な行為をします。そんな中で、私は必死に自分をごまかす。心穏やかでないけど、必死に平静を装う。そんな自分が切なかったし、その度に親の顔が浮かぶんです。」

## 《ナレーション》

京都での学生生活を、リアルに描いた、森口さんの原作をもとに、舞台劇が創られました。

「スダチの苗木」です。

【京都会館で上演された舞台劇「スダチの苗木」の一場面が映し出されます】

この舞台劇は、京都の中心部にある京都市立弥栄中学校の生徒たちが、校内文化祭で演じた人権劇がもとになっています。道徳の「中学生読み物資料『スダチの苗木』」を劇にしたものです。

生徒たちの演じた舞台を観た大人たちが、子どもの姿に刺激され、教師や地域の人々の協力のもと、独自の舞台劇を創り上げ、これまで京都会館で3度、そして、三重県や香川県でも上演されています。

【舞台の場面、森口さんの同じ大学の友人たちが、ワイワイと話しています。】

**友人A**：そこに住んでいるってだけで、就職差別や結婚差別を受けるってことは、やっぱり、どう考えてもおかしいと思うんだけど。

**友人B**：なあ、田村。とにかくあんまり深こう考えるな。あんまりしつこう言うてると、おまえも部落の間やて思われるぞ。

**友人A**：え？そりゃあ、大変だ。

【友人たちの言葉に、森口さんは何も返すことができず、黙って一人離れて立っています。それに気づいた友人が声をかけます。】

**友人C**：それはそうと、森口。お前、今日は妙におとなしいけど、どうしたんや？

**森口**：いや、べつに…。何でもないよ。

【何事もなかったかのように、森口さんは、友人と一緒に舞台の袖へ引き上げていきます。】

## 《ナレーション》

学友の心ない言葉にひたすら無関心を装う森口さん。しかし、その心は深く傷ついていきました。

【舞台の照明が消され、スポットライトの中に森口さんの姿が浮かびます。

どうしようもない思いを、自らにぶつけるように、森口さんは机を激しく叩きます。】

**森口**：あんなええ奴らやのに…！あんな、賢いやつらやのに…！正しいこと教えてやれたら…、必ず、それまでの考えも改めていける奴らやのに…。俺は…！なんて無力なんや！

【画面は、森口さんの実家。森口さんは、当手を振り返りながら、しみじみと語ります。】

「何と言うても、信頼する人、『こんな良い人はおらん』っていう人から出る差別の言葉っていうのは、本当悔しいです。本当に切ないです。アルバイト先で出会った。すごく私を大事にしてくれた『こんなに良い人はおらん』って思ったお婆さんが、私の前に、さっと4本指を差し出すんです。近くに住んでいる、地区の人を指して、『あの人はこれ(4本指)…』。そういう言葉を吐くんです。その4本指を見たとき、身体が震えてくるんです。何も返せん。必死に平静を装う自分があるんです。」

## 《ナレーション》

部落出身を隠し通す切なさ、虚しさを抱えながら、森口さんは4年間の大学生活を終えることになります。

【舞台劇「スダチの苗木」の場面。卒業を控え、自宅に帰り、卒業後にふるさとに帰ると家族に告げる森口さんの姿があります。その言葉を受けて、こんな会話が進みます。】

## 《ナレーション》

お父さんが、引越しを手伝うと言い出しました。

**父親**：卒業したら、下宿を出ることになるなあ。荷物もぎょうさんあるやろうし。

よしっ。いっちゃん、わしが取りに行ったらうか。

**森口** : えっ！父ちゃんが…！ええよ。ええよ。荷物なんて、それほどぎょうさんあるわけでもないし…。大体、きょうび、送ったら、それで済むやん…。

**父親** : 何を言うとか。おまえがお世話になった下宿の女将さんにも、挨拶せなならんだろう。

**森口** : ええ、言うてるやないか。

【画面は、現在の森口さんの自宅に変わります。当時を懐かしむように、あふれるばかりの笑顔で語る森口さん。その笑顔は、人間として解放され、豊かに生きられるようになった。安心して語れるようになった。そのよろこびにあふれています。】

「一度も、その下宿に来たことのない父親がやって来る。年に、1～2回やって来る、後輩の親たちの姿と自分の親の姿は、あまりにも違うんです。真っ黒に日焼けしています。太陽の下で、働いて働いて生きていますから…。『父ちゃん、布団くらいしかないんや。たいして荷物もないし、無理して来ることもないわ。仕事を休むことないわ』と言った時に、父親は、私の心の内を見抜いていました。

『健司なあ。そういうわけにいかんのや。あれだけ大事にしてもろうてなあ。しっかりと礼を尽くさないかんのや。それが、人としての道や…』って言うんです。」

【今の森口さんだからこそわかる。そんな父親への深い思いが、語りの一言一言にあふれます。】

#### 《ナレーション》

**袖(ゆず)の一種であるスダチは、徳島の名産として、広く知られています。引越しのその日、森口さんのお父さんは、自ら育てたスダチの苗木を持って、京都の下宿に、やってきました。**

【舞台劇の場面が変わります。

下宿の庭先。下宿の女将さんと、森口さんと、森口さんのお父さんが話しています。

森口さんのお父さんは、持ってきた苗木を女将さんに差し出します。】

**父親** : うちで大切に育てたスダチとキンカンの苗木なんです。

**森口** : 父ちゃん。そんなもん持ってきて、どうするつもりや。おばちゃん困られるやないか。

**女将** : そんなことないえ。こんな素晴らしいお土産、もらったことないえ。うち(私)…。

**森口** : すんません。田舎者の父で…。はずかしい限りや。この苗木は俺、持って帰るし…。

**女将** : 森口君！何を言うてるのや。あんたらしゅうない。何を恥ずかしがっているのや。

【庭先におかれた苗木を持ち上げ、謝り続ける森口さんを女将さんは叱ります。そこには、お父さんの精一杯のお礼の気持ちを、しっかり受け止めている女将さんの姿があります。それでも森口さんは、お父さんに背を向けます。お父さんは、森口さんを振り返り振り返り、一人で苗木を植えていきます。森口さんは、そのお父さんのまなざしを背中に感じながらも、背を向け続けています。】

#### 《ナレーション》

**森口さんは、どうしても手伝うことができなかつたと言います。**

【当時を振り返る森口さん。そのまなざしはお父さんを誇りに思うことができるようになった、そのよろこびと、お父さんの思いに寄せた温かさに溢れています。

お父さんを受け入れられなかった自分と、今の自分…。森口さんは、かつての自分に思いを馳せながら語ります。】

「親父は、一緒に植えたかっと思っんです。私は一緒に植えることができなかつたんです。食ってかかって、ふてくされて…。親父が、一人で、その苗木を植えるんです。このスダチは、私の同和教育の原点。人間としての生き方をつかんでいく教育の原点です。私自身が、人間として解放されていく。今まで恥ずかしいと思ったことがとんでもない。

今、『人間としての誇り…』『生きるよろこび』『人間としてどうあるのか…』そのことを自分の中でつか

んでいくことができるようになった。それは『スダチの苗木』に象徴される、私の『同和教育・人権教育のよろこび』だと思っんです。そしてそれは、人間としての生き方をつかんでいく教育のよろこびだと思っんです。それが私の原点です。」

#### 《ナレーション》

**大学を卒業した森口さんは、ふるさと、徳島に帰り、中学校の教壇に立ちます。しかし、そこで森口さんが見たのは、差別に喘ぎ苦しむ子どもたちの姿でした。森口さんは、子どもたちの心に響く同和教育を、情熱を持って実践し始めます。**

「さまざまな間違いをみんなで克服する！そういうつながりを俺はつくりたい！本当に出会えて良かったって言える。悪口を言うたり、陰口を言うたりする関係じゃなく。『私は、あなたが好き』って、お互いを認め合い信頼していく。そういうみんなのつながりをつくるためにこの学習がある。」

【子どもたちに精一杯の思いを伝える森口さん、身体全身で同和教育を実践していく姿に、同和教育の目的がしっかりと伝わってきます。そして、しみじみと子どもたちの現実、その課題について語っていきます。】

「自分が同和地区でないことを示すために、仲間を売るんです。『〇〇君が同和地区…』『〇〇さんがそう…』そんな言い方で、自分が同和地区でないことを示していくんです。そんな状況で揺れている子どもたちに、どう教えるか。どう伝えるか。どの生徒も、頭の中では差別はいけないっていうことはわかっています。この学習は、教師が教え込んで解決する問題ではない。生徒一人一人の内面にあるものを吐き出し合いながら『どうして差別してしまうのか』『どうしてそんなごまかしがおこるのか』『どうして差別の問題が自分の問題にならないのか』を自問自答していく営みの中で、一人一人の差別意識が洗われていくと思っんです。」

【森口さんの笑顔の語り、その語りの中から、「あなたはどう自分自身とどう向き合っていくのか？」そんな問いかけが聞こえてきます。】

#### 《ナレーション》

**森口さんは、クラスの垣根を越えて、学年全体で問題を語り合う全体学習という、これまでにない、まったく新しい同和教育のスタイルを作り上げました。**

【映像は、鳥取県の中学校。体育館に集まった全校生徒を前に、森口さんが進める全体学習が始まります。】

「今、校長先生が話していただいた『部落差別をなくす』っていうことは、『この問題を解決する、道筋を明らかにする』っていうことは、その差別の現実に気づくことを通して、部落差別をはじめとする様々な差別をなくしていく取り組みなんです。」

【この中学校での全体学習は、40分程の森口さんの語りの後、一人一人の生徒が、森口さんのまなざしに促され、励まされながら、ある生徒はひたむきに、ある生徒は恥しそうに、また、ある生徒は堂々と、目をきらきらと輝かせながら語り始めます。】

**生徒(男)**僕は学習会に行ってるんですけど…、学習会の中では…。

**生徒(女)**英夫っていう人は…。

#### 《ナレーション》

**本音で語り合うことは、自らをさらけ出すこと。その勇気を見せ合うことで、信頼の輪が広がる。全体学習は、子どもたちの心に大きな安心感を生み出していきました。**

この中学校は全校生徒300名くらいの日本海を望む場所に位置する学校です。何人かの教師が、実際に、森口さんが全体学習を実践してきた板野中学校の全体学習を参観し、板野中学校の全体学習に直接出会う中で、「自分たちの学校で全体学習を実現したい」と願うようになり、その教師たちの熱意が、森口さんを招いての全体学習につながっていきました。

この日の全体学習、生徒たちは、仲間の発言に勇気をもらいながら、1人、2人と手が挙がります。硬く緊張していた空気は、語り合う中で、少しずつ少しずつ笑顔に変わります。

この森口さんによる全体学習を実現した後、この中学校は、翌年から自分たちの手で全体学習を続けていきます。その力となっているのは、全体学習を体験した生徒たちの生き生きした、うれしそうな姿です。

語り合い、受け止め合い、全体の中で、許し合い、認め合い、人間として豊かにつながり合う中で、一人一人が解放されていく。その事実が、学校を動かしていくことをこの生徒たちの笑顔が教えてくれている、そのことを実感します。そして、その全体学習の本質について、森口さんの語りが続きます。

「学年全体で、本気で一人一人の思いを語り合っていくようになったときに、一人一人の生徒が変わっていったんです。生徒一人一人が自分を吐き出していくようになって、生徒一人一人が解放されていくんです。まさしくこの全体学習という営みは、生徒が生徒を変えていく授業、学習者が学習者を変えていく教育実践として機能していくという確信を持ったんです。」

#### 《ナレーション》

**森口さんは、21年間の教師生活の後、県の教育委員会に移りました。現在、土成町と、美郷村の、人権教育、人権啓発を担当。全体学習を通して得たたくさんのおもいを、地域に広げています。**

【土成町教育委員会の職場で、仲間と『人権教育だより』の編集に取り組む姿、電話で企業での人権研修の日程調整する姿、さまざまな活動に取り組んでいる様子が紹介されます。】

#### 《ナレーション》

**森口さんを囲んで、教え子たちが集まりました。就職に迷ったり、結婚に悩んだり、そんな彼らにとって、森口さんは、今でも人生の師なのです。**

【森口さんの故郷にある「鳥忠」という居酒屋。ここは、森口さんたちが全体学習の後、研修の後など、いつも集まり、語り合い、学び合い、元気のもととなっている場所です。

この日も、全体学習の実践でつながってきた、教え子たちと語り合うよろこびが溢れています。】

#### 《ナレーション》

**先月結婚したTさん。Tさんは、同和地区出身であることを、結婚前、彼女の両親に打ち明けました。**

**T:** 結婚した以上、差別を受けることもあるだろうし…、実際、それだけどきどきしながら、彼女の家に行くと、自分の地区出身という立場を語ったとき、彼女の両親から、そんなことは関係ないよって言うてくれたときのうれしさっていうのは、なんていうんだろう。

ごっつうれしかったって言うか…。

#### 《ナレーション》

**Kさんも、今、結婚を控え、Tさんと同じ問題を抱えています。彼女の両親に話すべきかどうか、揺れ動く心の内をKさんは率直に語り始めました。**

【Kさんは、Tさんの言葉に返すように語り出します。Kさんの周りには、板野中学校の全体学習でつながった仲間たちがいます。みんながKさんの語りに真剣に耳を傾けています。】

**K:** 板野中学校で今までの全体学習をしてきた自分とか、「自分が学校を変えたるんじゃ！」という思いで、高校に行ったときの自分の気持ちとか、そういうことを考えたら、やっぱり彼女の親にも自分の地区出身という立場を言うべきと違うんかなあと思う反面…。彼女が、深い意味はないと思うんやけど、「地区とか地区でないとかそんなん関係ない。別にそんなこと言わんでもいいんと違うん」と言ってくれるんですよ。そんな思いを聞くと、「別に言わんでもいいんかなあ」とも思うし、わからん…。

H：自分自身と闘って、勇気出して相手の親に言わなんたら、やっぱり前に進まんと思う。

K：だけどな、わしもそうも思う部分も正直言ってるけど…。何か…、それで今、ほんまに悩んどるんよ。

T：悩んで、こうなって、小さくなってたんではアカンだろう。

K：そんな小さくはなっていないけど、でも差別はやっぱり重いでえ…。やっぱりこうなるで…。

T：なるけどな…。

K：差別なくしたいと思うけど…、やっぱり、こうなるところがあるんよ。

#### 《ナレーション》

**森口さんは、決して答えを強要しません。考え、悩み、語り合うことが大切だと言います。**

【お互いが安心して、ありのままの思いを笑顔で語り合う姿がそこにあります。

同じ思いに揺れ、悩む仲間に、一人一人が真剣に生き生きと思いを返します。その一人一人の語りをニコニコと聞いていた森口さんが語り始めます。】

**森口**：人間としての誇りがあるから、踏ん張れる。でもな、人間というのは、同情や憐れみの中で、ついつい、その人間としての誇りを見失っていくことがある。まさに人間というのは、片方にすごい気高いものを持ちながら、片方にまったくそれと違う、卑屈なものを持ちながら、行ったり来たりしよるんが人間だと思う。

だからこそ、託也が言うように、自問自答を繰り返しながら、自分で自分を変えていくしかない。誰も変えてくれん…。自分で歩く。自分でできることをやるしかない。そこからしか始まっていかん。そのことが一人一人に問われていく。

#### 《インタビューに答えて》

**K**：今日、いろんな話をしてくれた仲間もおるし、みんなに力を借りながら、彼女とはしっかりと結婚したいですね。

【Kさんは、笑顔でしみじみと語ります。】

#### 《インタビューに答えて》

**T**：僕は、森口先生を最高にリスペクト(尊敬)しています。それは、僕なりの意見として伝えます。

(帰っていく途中こちらを向いて) Love and Peace!

【居酒屋「鳥忠」を出て、帰途につく教え子たち…。Tさんは、生き生きとうれしそうに、両手でVサインを出し、笑顔で「Love and Peace!」というメッセージを残し、軽い足取りで、走り去っていきます。】

#### 《ナレーション》

**中学生時代の全体学習を通して培われた信頼の絆。森口さんは、こうした人と人とのつながりを広げていくことが、差別解消の大きな道筋だと考えています。**

**地域での取り組みの中でも、森口さんはそれを熱く訴え続けます。**

【再び土成町の行政職員人権研修が映し出されます。】

「毎年、この全体学習の取り組みが盛り上がってきた時、板野中学校に異動してきたばかりの教師が、生き生きと自分を語る中学生の姿にショックを受けるんです。

『どうして中学生が、あんなに生き生きと自分のことが言えるのか。どうして堂々と自らの生活やその思いを語っていけるのか。』そんな思いを吐き出す30歳前の教師が私に『先生、僕は語れません』と言うんです。

『おまえ何が言いたい』と返すと、彼は『僕は言えません』と言い、自分と対話するように、自らの思いを絞り出すように、『僕の弟は、耳が聞こえませんが』と語ったんです。その一言を吐いた瞬間、その教師の目に涙が溜まったんです。

そんなところで、揺れとった教師が、この全体学習という取り組みを2回、3回と積み上げていく中で、



仲間の教師や、子どもたちに変えられていくんです。

それから何回目かの全体学習…。学年全体の語り合いの中で、彼がフロアから、生徒の発言に重ねて手を挙げたんです。彼は、静かに…、語り出したんです。

『ちょっといいですか。みんなの話を聴いて、自分の差別意識を洗っていくことが、この授業の意味だと思ったんで、みんなにつなげて、私の話をします。実は、私の弟は耳が聞こえません。極端な言い方をするけれど、家族の中だったら気軽に話ができるのに、いざ、家から出て、弟のことが話に出ると、自分の弟でないような、自分にはまったく関係ないような素振りをしてしまう。そんな自分がすごく恥かしいと思えてきた。本当に情けないと思うようになった。実の弟のことさえそんな目で見ると、ものすごく恥かしくなってきたんです。私の部落問題学習っていうのは、弟との関わりだと思うし、私はそんな自分を変えていくために、自分自身のために、この学習をしていきたい。』

仲間の教師が子どもたちに語るんです。その子どもたちがその教師に返すんです。人権教育、人権啓発というのは、まさに魂と魂のぶつかり合いの中で、私たちが解放されていくんです。」

【力強く語り続ける森口さん…。時に激しく、時にゆっくりと、そしてしみじみとした、その語りに、涙ぐむ人、じっと聞き入る人…。森口さんと参加者が一体となった研修会の空気があります。】

#### 《ナレーション》

**いじめ、不登校、差別落書きなど、今、ここにある具体的な問題を一つ一つ解決していく。森口さんの毎日は多忙を極めます。**

【研修会の打ち合わせの席、人権教育の大切さと可能性を熱く熱く語る森口さんの表情に、担当者は引き込まれていきます。】

#### 《ナレーション》

**森口さんの、エネルギッシュな行動を支えている言葉があります。20年も前から、毎年、手帳に書き写しています。**

【毎年書き続けた手帳が、画面いっぱいに広げられます。一冊一冊にその時々の、歴史が刻まれています。】

#### 《ナレーション》

**奈良県出身の教師、西口敏夫さんが書いた「よろこび」という詩は、部落差別解消に向けて、ひたすら走り続ける森口さんの心、そのものを表現しています。**

【画面に、「よろこび」の詩が映し出されます。】

#### よろこび

西口 敏夫

部落で生まれ、部落で育ち、部落で暮らし、  
運動と教育にいのちをかけて六十年。

或るときは、烈火の叫びとなり、  
或るときは、草にすだくむしのこえとなり、  
或るときは、鋭く差別の事実へ迫り、  
或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど  
この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありととも、  
この営みは、わが終生の運命なり  
しかして、この営みは、わが生命の生きがいにして、  
わが生命のよろこびなり。

(水平社宣言讃歌より)

【森口さんは、かつて、同和地区出身という立場へのこだわりや恐れがあった時、同和地区出身の先輩教師に誘われて参加した全国部落出身教師の会で、全国同和教育研究会元会長であり、部落出身教師として、自らの人生に誇りと自信を持って生き抜いてきた西口敏夫さんの「よろこび」という詩と出会いました。

この「よろこび」という詩に、衝撃を受け、共感し、そこから、森口さんの部落解放への生涯をかけた営みがスタートします。同和教育を生命のよろこびとして、さまざまな地域で精一杯の語りを続けていく中で、確かなつながりが生まれ、それが、また新たな出逢いを刻み、温かにつながり合い、広がっていく。そのよろこびをしみじみと、こぼれるような笑顔で語る森口さんです。】

「私の仕事は、どれだけ子どもたちと、地域の人たちと、いろんな人たちとつながっていけるかっていうことですからね。そういうつながりの中に、やっぱりそのネットワークが広がっていく機会として、他の町で、他の学校で、私の営み、私の実践を発信していくってことです。本当に楽しんでいます。人間が解放されていくってというのは、深刻な、暗い、辛い…。それでは先に進みません。」

【最後に、再び麻植郡人権教育研究協議会総会 記念講演で熱く語る森口さんを映し出します。】

#### 《ナレーション》

人は人とのつながりの中で、確実に変わってゆく。心許しあう温かい輪を、少しでも広げていくために、森口さんは今日も語り続けます。

ビデオ終了

#### 《司会者》

本日お招きしました講師の皆さまをご紹介します。お名前をお呼びしました講師の皆さまは、随時壇上の方へお上がり下さい。

本日のコーディネーターを務めていただきますのは、徳島県教育委員会生涯学習政策課社会教育主事 Aさんです。(拍手)続きまして、パネリストとしてご発言頂きます方々をご紹介します。山川町人権課課長補佐 Bさんです。(拍手)部落解放同盟鳴門ブロック協議会 Cさんです。(拍手)大阪教育大学学生 Dさんです。(拍手)以上、4名の皆さんでこの会を進めていただきます。皆さん、よろしくお願いいたします。それでは、A先生、この後の進行をよろしくお願いいたします。

#### 《コーディネーター A》

改めまして、こんにちは。ただ今からパネルディスカッションを始めさせていただきます。今、紹介がありましたように、3名のパネラーと共に、「今」「ここ」にある問題を、テーマに沿いまして、自らの問題としてこの人権問題を共に考えていく時間になればと思います。「ひとごとからわがことへ」をテーマに上げさせていただきました。

私は、昨年度学校現場を出ました。社会教育の中で様々な啓発の機会に出会わせていただきました。その中で、本当に豊かな出会いを重ねさせていただきました。人権教育のよろこびというのは、本当に「出会い」と「つながり」だということを確信します。

人間というのは、非常に残酷なものを持っていますけれど、片方に、すごく豊かなものを持っています。その、崇高なものに刺激し合いながら、「本当に出会えてよかった」という関係をつくっていく。そういう人間関係を築き上げながら生きるよろこびを共有していく、そういう学びが、各地域で、各職場で、各学校で広がっていく、そんなことを念じます。

こういう学習場面が様々な場面で設定されます。この取り組みがなかなか自分のことにならない現実があります。ノルマとして、その1時間1時間をただそこで過ごせばいいという部分で、なかなか学習の主体になっていけない現実があります。でも、そういうところを超えて、「私に何ができるか」という部分を問いかけていく学習が機能した時に、私たちはすごく素敵な仲間に、そして、人間の輝きに会っていきます。

学校現場で、私は、「生徒が生徒を変えていく人権学習」ということをずっと提起してきました。生徒の語りが生徒を揺り動かしていく。生徒の語りが仲間を癒し、自らを癒していく。これは、社会教育の場でもそっくりつながっていく、生きていくということを感じます。「学習者」が「学習者」を変えていく、本当にここで出会えてよかったという場面を、皆さんと共有できたらと思います。

最初に3人のパネラーの皆さんから、それぞれの営み、思い、願い、また取り組みを語っていただいて、会場の皆さんからさまざまな思いを返していただき、それに私たちがまた思いを返していく、そんな時間になることができればと思います。

実は、冒頭に観ていただきました「峠を越えて」の啓発ビデオですけど、そのビデオの最初と最後に山川町の「アメニティセンター」が出てきます。昨年の麻植郡の人権教育研究協議会の総会がありました。そこで記念講演をさせていただいたのですが、この記念講演の最初と最後の部分を啓発ビデオに使ってあります。その麻植郡が、今年の11月1日で吉野川市になります。

昨年度になるんですが、今年の2月7日でした。麻植郡としては最後の「人権教育研究大会」がありました。従来は講演を通しての学びだったんですが、「住民の一人一人がその人権学習に参加していく、そういう学びができれば」という中で、「せっかく啓発ビデオができているんだから、それを使って」という形で、本日とほぼ同じような形の研修会を設定させていただいたんです。300人から400人の人が集まっておられました。今日もこの会場にほぼいっぱいの方が集まっておられます。

今回、パネラーとして麻植郡からおいでいただいていますD君とBさんは、その時にも一緒にやらせていただきました。今回のもう1人は、鳴門市から来ていただいています。2月のフォーラムの時、フロアからいろんな思いが返ってきました。私が板野中学校で担任した、今22歳の教え子もビデオに出ていましたが、その子らが参加してフロアから語ってくれました。その語りが多くの人たちの思いを揺り動かして行って、様々な思いをそれに返していく。本当に、熱い熱いシンポジウムになりました。今日も皆さんの精一杯のまなざしを受けながら、精一杯の思いを伝えていきたいと思います。

最初に、2月の段階では高校3年だったんですけど、大阪教育大学の1回生になっています。実は、「展望」という同和対策推進委員会作成の人権問題のテキストがあります。今年度(2004年度)発行された「展望」の中に、高校3年の時のD君の意見発表の時の原稿が載っています。3年前の2001年の「展望」の中には、中学3年の時の彼の意見発表が載っています。彼は中学高校と人権問題に取り組んできました。いずれもそうです。その底にあるものは、やっぱり彼を取り巻く多くの人の思いや願い、その家族のぬくもりがあったと思います。そういったことも含めて、今からD君に語ってもらいたいと思います。では、お願いします。

## 《パネラー D》

### はじめに

今、すごいほめられていい気持ちになっているんですけど、大阪教育大学に通っています。Dと言います。

今日、こうして話してくれないかとA先生直々にご連絡があって、どんな話をすればいいのかすごく迷っています。まだ、人にどうだこうだというような実践もないし、活動もできていなくて、これからなんです。

まだ、大学には半年間しか行ってないんですけど、こんな自分が大学に行って面食らったこととか、この面食らったことというのは、プラスにしてもマイナスにしても、この大学の中でのいろいろな体験とかを踏まえながら、今日は話していきたいなと思って、この会に参加させてもらいました。

僕はK町の部落に生まれて、親が結婚差別にあったということがあり、僕には弟がいるんですが、僕たち兄弟は、親から部落問題に関していっぱいいろんなことに会わせてもらいました。生活する環境の中のことには、具体的な人権問題があるというくらい、身近に人権問題がある中で暮らしてきました。

### 中学校の時

小学校・中学校と学習会に通っていました。そこで出会った先生たちもすごくいい先生で、こういう人権問題や解放運動に関わろうと思ったのは、やっぱり、小学校・中学校の時の周りの人から最初に受けた影響というのもあったと思います。

やっぱり、中学校の時に友だちの家に遊びに行って、僕が帰った後に、友だちの近所のおばちゃんが、「あの子どもの子？」と言って、友だちが「〇〇の子だ」と言ったら、「あそこの地区の子は気をつけなさい」と言われたと、それを友だちから聞いて、「ああ、部落問題って自分のことやな」と思っていました。それまでは、知識としては結構知っていたと思うんですが、やっぱり、全く「たにんごと」っていうか、本の中のこと、映画の中のことっていう意識があったんですけど、その中学校の時の体験で「自分のこと」という意識が芽生えてきたと思うんです。

それで、紹介してもらったように、中学3年の時に作文を書いて、立場宣言を兼ねて、「みんなにも考えてほしい。今までの生き方というか、思いを認めてほしい」というのもあって、いろいろ先生や友だちに手伝ってもらいながら、全校集会で発表させてもらいました。そこで返ってきた意見というのが、すごい勇気をもたらしたり生きる糧になりました。「発表してよかったなあ」という気持ちにさせてもらいました。

### 高校の時

こんなふうに自分から前に進むことは勇気がいるんですけど、前に進むことによっていろんな信頼関係ができるし、何よりも自分のことになるっていうことが、中学校3年生の時に身をもって実感できたので、「高校生になっても絶対にこの活動を続けていこう」という気持ちもあり、K高校に通っていたんです。そこで「人権問題研究部」という部に入部して、何人かの中学校から来た友達も巻き込んで、他の町外からの友だちも巻き込んで、1つの大きい部にしていろんな研修をする場も作りました。県外にも行ったり、学校内でも、人権部が主催して愛媛県土居町の江口いときさんをお招きして講演会をし、司会も担当させてもらいました。

高校で幅が広がって、「将来何をしようかな」と考えた時に、「これまで勉強してきたこと、この温かさというのを子どもたちに返したいというか、伝えるような学校の先生になりたい」と思いました。

### 「人権意識の高い町で勉強がしたい」そう思って入った大学で…

高校の時に大阪を見た時、大阪というのは人権意識もすごく意識の高い町だなと思って、「是非、できることなら、そんな人権問題の盛んな、意識の高いところで学校の先生になる勉強がしたい」という思いを持って、大阪教育大学を選びました。僕が通っているのは、大阪教育大学の中の小学校教員養成課程の「総合認識系」という学科なんですけど、そこの入試がものすごく自分に合っていたというか、すごい面接を重視してくれる入試制度だったんです。

そこで僕の生き方というのを語って、それまでの、親や友だちや学校の先生が本当に支えてくれて、温かいこんな関係の作れる環境を僕も作りたいということを、長々と話させてもらいました。見事受け止めてもらえて、その熱い思いを持ったまま、大阪教育大学へ入学することができました。

ここからは大学の話になるんですが、初めの方はものすごいウキウキの気分で、「ここで人権問題をやってやろう」とか、「大学生だからいろんなことをやってやろう」という気持ちだったんですけど、うちの学科は人数がものすごく少ないんです。

全員で10人で、しかも女の子ばかりという学科なんです。そんな中で、自己紹介を兼ねて、どうしてこの学科に来たかという話になったんですが、そこで僕は、「高校でこんな活動をしてきて、大学でも続けたいし、人権問題を語れる先生になりたい」ということを10人の中で話したんです。

また、当然、僕の生い立ちも話したんです。「僕は部落に生まれて」というような、これまで話してきたようなことを話したんですけど、そこでまず、返ってきた反応が、「へえ、すごいなあ」とか「偉いなあ」と、どこか「たにんごと」だったんです。

僕の中では、「大阪教育大学の学生というのは、すごい人権意識の高い子たちばかりだ」と思っていたんですけど、「あれ？」というような感じになって、「何で、たにんごとのように考えるのかな」と、最初面くらいました。

実際に部落問題を扱う授業も大学に中であって、一緒に受けているんですけど、授業が終わった後にいろいろ話をすると、「D君は、勉強していることはすごく偉いと思うけど、私は、実際に活動しようとは思わん」と、直に言われるんですね。「そんな活動をするくらいなら、バイトとかサークルとかしたいことをする」と言われた時に、初めて「人は怖い」と思いました。

これだけ、今まで高校までのびのびと活動で来てきたのは、それだけ周りに恵まれていたんだということを実感して、親からも、「お前が考えているほど世の中は甘くないぞ」とよく言われていたんですけど、わからなかったですね。水平社宣言の「人の世がどれだけ冷たいか」というのを考えられていなかったのも、「怖い」と思いました。

「ああ、僕ら、この子らに差別されるんかなあ」と思って、1回でも「怖い」と思ってしまったら、正直言って本音だ語れなくなりました。その、逃げ腰になっていた自分のはっきりわかるんですね。部落問題の話題になった時に、知っている知識は話しているんですが、「自分の本当に抱えている思いがなかなか口にできない」という状況が4月5月辺りにはありました。

### **障がいのある人の介護サークルに入って**

そんなちょっと下を向いている時に、一人の障がいのある方の介護のサークルがあるんですけど、そのサークルに入らせてもらって、その、障がいのあるおじさんと話をしている中で、その下を向いていたのをどンドン上を向かせてくれたというか、そんな出会いがありました。

そのおじさんは、「脳性麻痺」という病気になっていて、寝たきりで言葉もままならないという障がいのある人なんですけど、そのおじさんが大阪教育大学に講演に来てくれていて、「いろんな人権問題に関わってやろう」と思っていたので、その講演を聞きに行きました。

その講演がきっかけで、「じゃあ、サークルに入らないか」と先輩から声がかかり、それをきっかけに、1回訪問に行かせてもらったんですけど、最初は、「障がいのある人の介護に入るのは面倒くさい」と思っていました。

実際に、平日に授業を1日つぶして介護に入らなければならないんですけど、「俺は勉強をしに来ているし」という思いがあって、なんやかんや言い訳をつくって、最初は介護に入るつもりがなかったんですけど、3回ほど、介護ではなく訪問という形でそのおじさんと話をさせてもらったんです。

そこで、「僕も人権問題を熱心にやってきたんです。」と伝えたら、そのおじさんには、僕の心を見抜かれたというか、「同和問題・部落問題」で考えたら、部落出身なので差別される側、被害者側になっているんですけど、障がい者の問題で考えたら、おまえは健常者でわしは障がい者で、だから、お前は差別する側に立つんだよ」ということを話してくれました。

言語障害があるので、一気に聞き取りにくかったんだけど、一言一言一生懸命に語るおじさんの目を見ながら聞いて、僕は、「ホーッ」と思って、「障がい者の問題をたにんごとに考えていた」、そんな自分に気づかせてくれました。

気づいた後、「部落問題をたにんごとに考えている人」と「障害者問題をたにんごとに考えている自分」を置き換えて考えることができ、「どうしたら意識が変わるんだろう。自分でさえ障害者問題に置き換えたら、なかなか自分のこととして考えられない自分がいるのに、部落問題を本当に自分のこととして考えてくれるのかな、相当に難しいのと違うかな」と、どんどんこんがらがっていったんです。

でもその時に、そのおじさんが、「自分は介護に入ってもらう時に、『馴れ合う』とか『触れ合う』という言葉は嫌いだ。自分は、馴れ合うとか触れ合うという介護を求めている。じぶんは、介護者、健常者とは、ぶつかり合いながら生きていく。これは、今までもそうだったし、これからもそうだ。」そう話してくれて、「ああ、これなんだな」と思いました。

実際、そのおじさんの年は55歳くらいで、僕も障害者問題については意識が低くて、ズバズバ差別的なことを言っていると思うんです。そのおじさんには結構怒られているんですけど、僕だけでなく、何十人もの介護者さんと関わっているのだから、そんな人から、意識的にはないにしても、差別的な言葉を浴びせられて闘っているおじさんもしんどいなあと思うんですけど、そのおじさんが、すごく輝いているんです。

### 差別をなくすということ

やっぱり、差別をなくすということは、A先生も言われますけど、「本音で語り合うこと」、それが一番大事なことというのを思い出して、僕に今できることというのは、「問題とされていることは僕には関係ないよ。僕はその人を見ていくんだ。」と言えるほどに、どうやって関わっていくかということだと思えます。

そういうふうになっていくことが、すごい怖いという気持ちもあるんですけど、やっぱり言わなかったら変わらないと思うし、そんな生き方を実践している人が僕の周りにはいっぱいいて、そんな生き方を僕もしたいし負けたくないのだから、また10月から大学の後期が始まるんですけど、そのいろんな場で伝えていけたらいいなと思います。

今日もここに呼んでもらって、僕の友だちも香川に行っている子とかいっぱいいるんですけど、「今日ここで話をするから聞きに来てくれ」と言ったら、「忙しい」と言いながらも聞きに来てくれる友だちもいたり、これまで出会ってきた学校の先生も、学校を休みながらでも聞きに来てくれています。僕の周りには素晴らしい先生方もいっぱいおられます。悩んだら相談できる人もいっぱいいるので、そんな環境をつくれるように、また大学で、再スタートで頑張りたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

### 《コーディネーター A》

無関心な人たちのいろんなやり取りがあります。ビデオにもありましたが、本当に自分の大学時代なんかも重なってくるんですが、やっぱり、雰囲気は殺されます。

私たち職場の雰囲気はどうでしょうか。地域社会の雰囲気はどうでしょうか。本当に共感し合える、思いを通じ合えるつながりを作りたいなと思います。

地元鳴門から、Cさんにパネラーになっていただきました。お願いします。

### 《パネラー C》

#### はじめに

失礼します。今、A先生からご紹介を頂きましたCです。前に座っている中では、1人地元出身なんですけれども、A先生の方からご連絡いただく時に、ほかの2人のパネラーの方は、本当に選ばれてここにいるんですけども、最近、「男女共同参画」というのがよく言われています。どんな場でも、女性を入れとかな

いかんということで選んでいただいたと思います。

私自身を選んでいただいたということではないので、特に、先ほど話されたDさんが、自分自身のことを原稿もなしにどンドン話されるのを見て、「負けた、私は何を言ったらいいんだろう」と、この壇上に上がる前からプレッシャーを感じていたんですが、なお、プレッシャーで、皆様方の前で、支離滅裂なことを言うてしまうかもしれません。

### **私の過ごしてきた30年**

自分自身の自己紹介ですが、私は肩書の通り、「部落解放同盟」というところに所属して、解放運動を始めて、今年でちょうど30年になるわけです。30年やってきた中で、私自身がどう変わったかということについてもお話ししたいと思います。Dさんのお話ではないんですが、年数を重ねるだけがいいのではなく、やはりその中で、「どういう生き方を、私自身が信念をもってしてきたか」ということだと思っています。

Dさんは、20歳になるかならないかですが、すごく自分自身に誇りを持って、生き生きと輝いています。「私の30年は何であったんだろう」と、反省を込めながらお話させていただきたいと思います。

同和教育というのが、今から30数年前に始まりましたけれども、私は、小学校・中学校・高校と、同和教育は全く受けていない世代なんです。私自身が、被差別部落出身であるということを初めて知ったのは小学校4年生の時でした。

### **親から聞かされた自分の立場 ～初めて受けた差別発言～**

私の講演を何度か聞いた人は、「またCさんが言いよるなあ」と思われるかも知れませんが、親から聞かされたんですね。普通は、親は私よりもまだ、同和教育に対して、「差別されても仕方がない」と思っていた世代ですから、「しゃべりたくない」「聞きたくない」というような思いを持っていたと思います。

ある時に、父親が、「この地域に生まれた者は差別されるぞ。」みたいな言い方で教えてくれたんですけど、私はこの時、父親に、「何で差別されるの？」と聞いたんですよ。しかし、家庭の経済状況、住んでいる環境とかそういうのを見たら、同和地区と地区外とは違うんですね。だから、「こんな状況だから差別されるんだろう」みたいな感じにしか、当初、私は受け取っていなかったんです。

しかし、中学3年の時です。これは本当に一生忘れられない事なんですけれども、本当に露骨な差別発言を受けました。私がこの運動に携わって、もう十数年くらいあちこちで講演等でお話をさせていただくんですけど、こういう場所で、「中学校で差別発言を受けた話」というのは、自分自身の中で心の奥の奥へしまい込んで、ここ数年くらいからしか話せなかったんです。

今は、「自分のことをさらけ出して皆さんにお話をしていく中で、差別をなくす仲間になっていただく」ということで、自分自身のことを丸裸にしなければいけないのに、それができるようになったのが、つい数年前だったということです。

本当にお恥ずかしいのですけれども、「中学校で差別を受けた」というのは、中学3年の時の教室の中でのことだったんです。教室の中には、10人居たか居なかったかくらいなんですけれども、その中で被差別部落出身は私一人だったんですね。それで、ある男の子が、2～3m離れたところから、賤称語で「エッタ、エッタ」と、私に聞こえるか聞こえないかくらいの声で言ったんです。

もちろん、これは私に言ったことだというのはわかっています。その時は、さっきのビデオにも出ていたように、A先生が、「差別発言とか、差別的なことをされたらかたまってしまう」と言っておられた場面がありましたね。あのビデオを観た時に、「ああ、私もそうだった」って、本当にどう言ったらいいかわからないんですけれども、その場所にうずくまってしまっているんですか、「私には関係ない」「私には聞こえていない」というふりをする事しか、その時にはできなかったんです。

同和教育があって、「差別は間違いや」と言える時代だったら、ひよっとしたら、私はその子に「何を言

いよるん、それ！！」と、くってかかれたかもわからないんですけども、私自身の中に、「差別されても仕方がない」という思いが半分以上ありましたから、その時は、本当に我慢するだけでした。この話を講演の時などにしたら、次から次へ涙が出てきます。

### **この地から離れたい ～そう思って行った大阪で…～**

今日は、自分でも泣くのは抑えようと頑張っていますから、泣かないつもりなんですけれども、本当に涙が止まらなくなって、あとの話が十分にできなくなったという経験があるんです。A先生のビデオと重なりました。この差別発言を言われてからよけいに、ビデオの中のように、「故郷から出たい」「この地から離れたい」と、ずっと思いました。

それだけではなくて、やっぱりいろんな場所へ行ったら、「どこから来とる？」「どこに住んどる？」という日常的に使われる会話なんですけれども、そのことを聞かれるのがものすごく嫌でしたね。聞かれても、私の住んでいるところは、同和地区と地区外と両方ありますから、その大字名を言っても同和地区とは限らないんですね。しかし、その大字名さえ言えずにいました。〇〇町までしか言えない自分がずっとありました。

高校を卒業する時に、私は大阪の方へ出て行ったんです。逃げていました。大阪でしばらく就職していたんですが、その時に付き合っている人がいました。私は、その人が結婚をほのめかす雰囲気を感じ取れたんですね。私自身は、付き合うのはいいけれど、結婚は絶対に地区外の人とはできないと思っていました。今考えたらおかしいことです。

なぜできないのかおかしいことなんですが、当時の私は、誰に言われたわけではないんですが、「地区外のこの人と結婚したら絶対に不幸になる」と自分に言い聞かせていましたから、その人が、「結婚をしたい」というようなことを言った時に、私は、もうこの人と別れる時期が来たと思って、その人には、「自分は部落出身だから結婚はできない」というようなことは何も言えず、その人と別れて徳島へ帰ってきたんです。

### **部落解放運動との出会い**

差別から逃れるために徳島を出たのに、差別と出会って(直接的な差別ではないんですが)やっぱり、結婚ということが目の前に来た時には、「その人から離れる以外にない」、自分自身の中にその思いがありますから、自分で徳島へ帰ってきました。

差別は、逃げてでも逃げてでも追いかけてくるんですね。ちょうど私が徳島へ帰ってきた時に、この「部落解放運動」との出会いがありました。本当に、最初は、「部落だ部落だ、差別だ差別だと言うから差別がなくなるならいい。なんであんなにわざわざ人前で言うんだらう。あんなことをするからよけい差別をするんだ」という思いが私の中にあっただんです。

けれども、この解放運動に出会って、いろんな人たちの話を聞く中で、本当に頑張っている素晴らしい生き方をしている人たちの話を聞く中で、「この、差別をなくしていくための解放運動というのは本当にしなければならない。本当に大事なものだ。私の一生の生き方として解放運動をしていこう」と思って、30年経ちました。今は、「逃げる自分」というのは完全に払しょくできていますけれども、人前で、しかも、その人を説得できる、話す内容を十分にわかってもらえる、そのような話はなかなかできないんですね。

ここに座った時も、ビデオが結婚差別をテーマに取り上げていましたので、そのことを中心に話をしようと思いましたが、時間がだいぶ経過していますので、どうしましょうか？(コーディネーターを振り返りながら確認。笑顔で発言の続行を促すコーディネーター)

### **娘の交際と結婚に向き合って**

かまいませんか？いらんことをよくしゃべりますので…。(会場に笑い)結婚差別の話なんですけど、私自



身は結婚差別から逃げて、自分から体当たりで生きていくという事はできなかったけれど、自分の子どもたちには、自分の好きになった人と結婚してもらいたいという気持ちや、差別を乗り越えてもらいたいという気持ちがものすごくあります。

娘の話ですけれども、大学時代か大学を卒業したくらいの時期に、つきあっていた人がありました。その人とつきあって1年くらいした時に、娘に、「その人はあんたが部落出身、同和地区出身ということを知っているの？」と聞いた時に、「いや、知らんやろう。言っていないから」と答えました。私はその時、「まあ、友だちや恋人同士として付き合うのだったら別に言わなくても構わんけど、あんたが結婚をと考えているんだったら、絶対に部落出身だということを言いなさい」と娘に言いました。

そして、また1年くらい経って、「言うたか？(部落出身ということを)」と聞いた時も「いや、まだ言っていない」と言うんです。やっぱり部落の子どもにとっては、「自分が好きになった人に、部落の事を打ち明けることで、その人が自分から去ってしまわないだろうか」という思いがものすごくあるんです。

ですから、心の中は、ビデオに出ていた人たちも、皆さん体験があると思うんですけど、後からその思いを語ってくれると思うんですけど、自分の中で悶々としていると思います。

多分、娘もそうだったと思います。

それから1年ほどして、ぱったりと彼が家に来なくなりました。尋ねてみると「別れた」ということだったんです。その別れた理由というのは、娘も言いたがりませんでしたし、私も聞きませんでした。結局、彼には部落出身ということは言わずに別れたんだと思います。結局、言えずに別れてしまったという状態で、私は、特に、女の子が地区外の男性と結婚して子どもができていく中で、結婚した先で、100%周りに祝福されて結婚するというのは少ないと思います。

誰かが差別意識を持っているんですね。家族でなくても親戚とか。特に、女の子が地区外に出て結婚した場合には、「差別的なことへどれだけ耐えられるか」ということが勝負なんですね。それで耐えられずに子どもを連れて帰ってくるというケースを、私はこういう運動をしていますから何件も知っています。それで、子どもを親に預けて自分はまたよそに働きに行く。親はせっかく子育てが一段落したのに、また今から孫育てをしなくてはならない、こういう事例というのがたくさんあります。

そういう思いを娘にはさせたくないという思いは、ものすごくありました。今はつきあっている人はいないらしいんです。結婚してもいい年ごろなので、娘たちは友だちと紹介し合うというのが結構あるみたいですね。

## 20代の若者から言われた差別発言

娘も、「いい人があったら紹介してよ」と話したらいいんです。そうしたら、友だちがある人に、「こういう子がいるんだけど会って見ないか」と薦めたらいいんです。そうしたら、20代の若者ですよ。その男の子が、「同和地区の子と違うだろうな」と言ったらいいんです。

その友だちは、部落差別に怒りを持っている子だったので、「どうしてそんなことを言うのか」と相手に返したらいいんです。そうしたら、その男の子が、「親といさかいになるのは面倒だから、最初に聞いておいてそういう子とつきあわないようにしているんだ」と答えたと言うんです。

同和教育を100%受けている子どもですよ。若者ですよ。その子がそういうことを言うんですよ。それを聞かされた時には、私も親として、なんというか、私の時には「なぜ自分を部落に生んだのか」と親を恨みましたが、こういう考え方は差別から逃げる考え方なんですけど、私は、「私の娘でなかったら、そんな目にあっていないかもわからんなあ」「部落に生まれなかったら、こんな思いをしなくてもよかったのに」こんな気持ちも持っています。

このことは、私が娘の友だちから聞いただけですので、娘は知らないと思います。

同和教育をやってきた中からそういうことがあるので、まだまだ同和教育というのは必要だなと思います。

法が切れて、「同和教育」から「人権教育」ということで、部落問題、同和問題の中身が薄められるということはないと思いますけれども、やっぱり、こういう現実を目の当たりにしたら、どんどんどんんやってほしいなという思いがあります。

### 最近起こった兄弟の受けた結婚差別

(コーディネーターに)もう少しかまいませんか?……あとね、私が話をする機会がまたあるかどうかわかりませんので、(会場に笑い)最後にもう少し話をさせていただきますが、これも結婚差別の話なんですけれども、私の地域にある青年部は、最近活動がものすごく活発なんです。大体どこの地域に行っても、「青年の集まりが悪い」「若い人の集まりが悪い」って言うんですけど、私の地域はどういうわけか活発です。またよかったら交流に来てください。

その地域の中で、青年2人、兄弟なんですけど結婚差別を受けました。つい最近の話です。1人はお兄ちゃんなんですけれども、相手は同じ市内の女性なんです。わりと長いこと付き合っていたみたいで、そろそろ結婚をとということになりましたが、彼女の親は部落に対してあまりいいイメージを持っていない。差別意識をすごく持っている。「多分結婚は許してくれんだろう」ということを2人は察していたと思うんですね。

彼のことを言っても、結婚は絶対許してもらえない。許してくれないのなら既成の事実を作ってしまうということで、妊娠したらいいんです。「妊娠していたら、多分親は折れて許してくれるだろう」と思ったのですが、それが甘い考えだったんですね。妊娠していようがいまいが、親は猛反対です。彼女は強い意志で、彼と2人で頑張っていくつもりだったんですが、家に帰ったら親からどんどんどんん言われて、彼女はそれに負けてしまうんですね。そして、ついに、できた尊い命を中絶してしまいます。

詳しく言ったら時間がないので簡単に言いますが、結局2人は別れてしまいました。女の子の親や親せきとかが差別意識が露骨で、お兄ちゃんの両親があいさつに行っても、戸をあけて玄関先にさえ入れてくれないんです。普通、誰かお客さんが来たら、玄関くらい入れますよね。敷居さえまたがせないんです。追い返してしまうという、「この話は聞く必要がない、話す必要がない」ということです。

私たちの地域は、小・中・高校生で学習会があるんですけども、学習会を受けていた兄ちゃんは、「差別差別というけれど、差別を受けることはないだろう」と軽い気持ちで思っていたんですが、自分がいざその結婚差別に出会って、「差別ってあるんだ!!」と言って、この子は、本当に地域の先輩がいなかったら、ひょっとしたら命を落としてしまっていたのではないだろうか、自ら命を絶つとるんじゃあないかなと思うくらいになっていました。

その子は、「やっぱり、差別をなくすためにはいろんな学習や解放運動がいるわ」ということで、それからは、積極的に青年部の活動や学習会など、いろんなことに関わっています。この間も、徳島で、「全国青年集会」といって、全国から1000人近く集まる全国大会があったんですが、その会が行われた3日間ずっと通い続けました。

青年部の地元の学習会でも、ちょっと途切れていると、「今度いつするの?早くしてよ」という感じで、自分の体験を通して、こんなにも積極的に変わるかというくらい、本当に差別をなくす取り組みの先頭に立つくらいの若者になってくれたと思っています。

もう一人の弟の方は、結婚に成功した例なんですけど、弟の方も結婚相手が地区外の人で、最初は反対だったんです。反対をするというのが、両親は反対ではなかったそうです。お前が好きだったら」という感じで、もろに反対するということはなかったそうです。が、女の子の弟の方が、「姉ちゃんが同和地区の人と結婚したら、僕が結婚する時に困るわ」ということだったんです。

弟といたら、それこそ同和教育を受けている世代です。しかも、同和教育に熱心な中学校で育った子なんです。その弟がそう言うんです。その弟も、お姉ちゃんの熱心な説得もあり、わかってもらえて、今年の1月に無事に結婚式を挙げたという、めでたいお話を最後にして、こんなに話すつもりはなかったのに、

ものすごい時間を取ってしまったことをお詫びして、また話す機会があればマイクを回していただきたいと思います。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

差別の厳しさに、いろんな思いが会場の皆さんの中にあふれたと思います。本当に、出会ってきた親御さんや子どもたちや、その一つ一つの切ない思いがグッとこみ上げてきます。そういうつながりが広がっていくような学習をしていきたいと思います。

ただ、差別の事実を教えただけ、いうなら、差別の仕方を教えたような教育になっていなかったかということ、私たちも反省していきたいと思います。本当に研修のあり方を考えていきたいと思います。Bさん、お願いします。どうぞ。

#### 《パネリスト B》

##### はじめに

(会場に向かって、ニコニコと)お久しぶりです。お元気ですか？Bと言います。是非とも僕の話聞いて帰ってください。僕はねえ、鳴門の方にやって来まして、ここでお話をする機会を頂いていまして、最後までいて質問を書いておいてください。よろしくをお願いします。

僕は山川町からやってきました、Bと言います。山川町と言ったら、イメージとして山と川しかない所かなあとわれそうですが、その通りです。(会場に温かい笑顔が溢れる)そこから来ました。

せっかく鳴門に来たんですから、僕が思っている鳴門のイメージというのを話させてもらいます。鳴門というのは、15年くらい前には、僕は徳島県ではない鳴門だと思っていました。道もきれいです。建物も立派だし、施設もいっぱいあって、デートコースによく使っていました。

ちょうど15年前、結婚した時にも鳴門教育大学の方に巨大迷路があったんですね。あそこへ行ってデートしました。迷路の中でメロメロでした。(笑いがおこる)そういうイメージを持っていました。今は、鳴門をどう思うか。僕だったら、「元気ないなあ」と思います。同じ鳴門です。でも、イメージがこれほど違うんですね。

##### 同和教育や人権啓発 ～大切なイメージということ～

これは、同和教育や人権啓発も一緒だと思います。イメージというのは、すごく大事なんです。「また人権問題の話をするのか。また堅苦しい話だろう」と思ったら、なかなか足を運んでくれません。イメージを大切に、この意識を変えていこうというのが役場での僕の仕事です。

それともう1点、もう一回立たせていただきます。僕は自分自身のダイエットを続けています。今日も、見苦しいんですけど、腹巻ダイエット(服を持ち上げ腹巻を見せながら)を去年の6月から続けています。もう1年と3か月経っています。効果はといたら、見てもらった通りですが、ちょっと上手くいってないような気がしますが、楽しくやりたいなと思ったのでいろんな本を探しました。

これは、継続は力です。人権問題も同じです。自分でいろんな方法を考えて、継続していくのは力だと思っています。ですから、こういう企画をしていただいた鳴門市教育委員会の皆さんには、大変感謝しています。こういう機会を、どんどんどんどんつなげていければいいなあと思っています。

##### 前の席が空く人権の研修会

それで、そういう前置きから話していくんですけど、どういうことを話したいかということ、今日、たくさん山川町から記念品を持ってきました。是非とも、質問とか意見を言ってくださいね。いっぱい持って来ていますので、言われた方にプレゼントします。前の方へ来てくれたら、記念品をプレゼントします。

山川町がどんな啓発をしているのかといたら、こういう人権啓発の研修会とか講演会は、いつも前の席が空いていますが、「どうしたらみんなが前に来てくれるかな」と一生懸命考えました。前の方の椅子の下に記念品を置いているんです。今日、椅子の下に記念品があります。もらってください」と、こんなことをしていたんです。

啓発のやり方にも、いろんな切り口があるのではないかと考えています。今日、ビデオで紹介してくれた「江口いとさん」、山川町では3年間で7回呼んでいます。山川町で江口いとさんを知らない人はもぐりだと思えます。それくらい連続してやっています。恵比寿舞(三番叟「阿波木偶箱廻し」)の辻本一英さんにも、連続4回講演をしていただきました。

### **実行委員が生き生きとする ～自分たちでつくる研修会～**

今までは、役場の方で全部設定してくれて、今日は、皆さんは動員で来ているのではないと思います。進んできてくれていると思いますが、一生懸命、いろんな所に動員を頼んだりして集めてきたことが多いのですが、うちの所は違います。

実行委員の方で、「同和教育の講演に江口いとさんと呼んでくれないか、Bさん」と言って電話がかかってくる。そこで、江口さんに連絡を入れ了解を取ります。そのことを実行委員会の人に連絡すると、いつもでしたら、こちらが「ありがとうございます」と言うんですが、逆です。「よくやってくれたな」とお礼を言ってくれます。

これまでと立場が違うんですね。自分たちでやりかけた啓発になったら、きちんと自分たちのものになっているんです。自分たちの組織でこんなことをやったんだということで、大変生き生きと僕に話をしてくれます。同じように、研修会の時も、やっぱり自分たちも作り上げた研修と、お客さんで来て聞いた研修は全然違うんだなと思えます。

ですから、そういう研修方法もあるんだということも知ってほしいと思います。

### **大島清松園と賀川豊彦記念館とのできごと**

今日、本当は最後に話したかったんですけど、ちょっといい話を最初におきます。鳴門に来たので鳴門の話をして。ちょっと古いかな。2002年の1月なんですけど、香川県の「大島清松園」、元ハンセン病の患者さんたちが隔離されてきた島です。山川町教育委員会で議員の方とか、老人会の方とかみんなを連れて交流会に行ってきました。

そこで話をしたら、交流会をした集会所にも賀川豊彦さんの掛け軸があったんです。大島清松園の入所者の人たちから、「賀川先生、よく来てくれて話をしてくれたんですよ」という話を聞きながら、僕は行くまでに、「鳴門で賀川豊彦記念館ができる」という新聞記事を読んでいましたから、「鳴門で賀川豊彦記念館ができるんですよ。」と話をしたら、「賀川先生には大変お世話になっています」と言われました。そして、「賀川豊彦記念館に行きたい。寄付をしたい。」と申し出があって、「Bさん、帰ったら鳴門に連絡してもらって、そちらから連絡してもらえないだろうか」と依頼を受け、連絡させてもらったんです。その時にこんな手紙を頂きました。

「3月もいよいよ後1日になりました。島の桜も美しく咲いているようです。去る1月には初めて清松園を訪ねてくださり、短い時間でしたが、時間を与えられ感謝でございました。鳴門の賀川先生の記念館のお話に、さっそく私たちの小さな贈り物ですが、2名で1万円ずつお送りさせていただきました。10日ほど経って、丁寧なお礼のお手紙と領収書が届きました。

3月21日に完成式典にご案内を頂きましたので、私共2人と園長の3名で参加しました。会場には、寄付者の氏名・金額等が書いてありましたが、私共のものは書いて無く、また、Iさんが5万円送ってくださったのに、1万円のところに名前が書いてあったとか、何かスッキリしないものを感じました。」

この手紙を頂いた後、私は、早速記念館へお邪魔しました。それで、「こういう手紙を頂いたんです。」ということで記念館の事務局の方にそのお手紙のことをお話させていただいて、それで、記念館の方から、さっそく大島清松園さんにお手紙を書いていただいたそうです。それで交流が持たれたということで、僕としては大変にうれしかったです。それ以後、大島清松園と賀川豊彦記念館とで交流会を持っているということで、もう一度お手紙を頂きました。

「4月も残り少なくなりました。暖かくなつたと思えば寒くなったり、それでも朝晩はずいぶん涼しいですね。その後、お変わりなくお過ごしのことと存じ上げます。私どももおかげさまで元気に過ごさせていただいておりますので、ご安心くださいませ。賀川豊彦記念館の館長様よりご丁寧なお手紙をいただいたり、訂正されたものが届いたということで安心いたしました。おかげでもやもやが晴れ、スッキリ致しました。本当にありがとうございました。」

後も続くんですけど、こういう手紙を頂きました。こういうことがすごく大切だなと思います。ちょっとしたきっかけで、こういうチャンスはごろごろしていると思います。

僕は役場の中で合コンを設定するのが得意なんです。その中で大分前なんですけど、そんなことをやっていた時に、ある時仲のいい友だちで部落出身の友だちがおります。その彼から、「B、僕もいい子紹介してくれんか」と声がかかったんです。その時、初めて即答できませんでした。Cさんからお話頂いたので、僕もまたやっていきたいですね。

### 人権啓発を始めた頃の自分と 変わった今の自分

役場の職員になった時に、一番最初に、山川町の地区別懇談会に行ったんですね。各地区によっていろんな啓発をしています。最初に行った時に、僕は「始まります」と言って映画のスイッチを入れ、スイッチを切って、「終わりました」と言うだけの担当でした。同和問題なんて何もできない担当でした。

それが、今こうして、こういうところで座らせてもらって話をする機会を与えられています。その僕が、地区別懇談会などでどう言っていたかという、「社会が悪い」「社会の仕組みが悪い」「こんな制度を残している社会を変えていかないといかんなあ」という話をよくやっていました。自分自身のことでなかったんですね。

友だちから女の子を紹介してくれと言われた時に、即答できなかった自分。他の友だちにはすぐに「おい、ええ子がおるで」って、必ず紹介していました。そんな、紹介できなかった自分がここにおります。「これ、社会の問題だけと違うやろ。自分自身の問題やないか」と、初めてそこで1回目の大きな気づきがあります。その時の自分に比べたら、僕は、今の自分が数段かっこいいと思います。その彼が、「B、講演会に行ったら、ちゃんと頑張って言ってきてくれよ」と励ましてくれています。

僕は、本当はすごく恥ずかしがり屋です。こういうところは苦手だったんです。仕事でこういう会に来ていた時に、「まてよ。もしかしたら、こうして集まっているんな話をしているけれど、給料をもらっているんだぞ」と思いました。

これまでいろんな講師の方の話を聞いています。こういうプラスになる話をいっぱい聞くんだから、自分自身もやっぱり聞いてくださる皆さんにお返しをしていかなければならないという気持ちがおこった時に、僕は変わったかなあと思います。

どこにでもきっかけは転がっていると思います。このチャンスを是非とも逃がさないで、皆さんに掴んでもらいたいなあと思います。ずっとやっているんですけど、僕は、いろんな服を着るのが好きなんです。今日は、黒い蝶ネクタイをつけています。今日は、ちょっとかっこよくなっていい気分なんですけど、それだけではないんです。

僕は、人権問題の研修を受けていたら、かっこよくなると思います。僕は、10年後の自分を見たいと思います。きっと、もっとかっこよくなっていると思います。そのためには、やっぱり、いろんな交流を持

ったり、話に行かせて頂きたいと思うんです。

今日、僕は扇子を持って来ています。(手に持った扇子を広げて持ち上げながら)皆さんも、絶対に「センス(扇子)アップをしていただきたいと思います。

(会場に温かい笑いがこぼれる)あと、終わる前には、もう1回僕の前にマイクを回してもらいますので、皆さん、質問をしてもらうように宜しくお願いします。(拍手)

### 前半終了

### =意見交換=

#### 《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。笑いが止まらないと思いますが、いろんな行事をやります。いろんな研修会があります。その多くがノルマです。誰が主役か。主役がおらんようになります。講演会も、後ろから後ろから詰まっています。前へ前へ出てきます。コンサートでは一番前は一番いいところなのに、一番いいところが空いてきています。そういう所からも意識が変わっていかなければ、私は本物にならないと思うんです。

やっぱり、「大変な問題」「あの人たちの問題」というところに立っている私たちの切なさ。この場の雰囲気は私が作るんだという思いで、この研修会に参加できた私が、この研修会を最高のものにしていくんだという最高のまなざしで、心の奥にあるものを表現し合う中で、自分の中に様々な気づきがあると思うんです。

今、話にも出てきましたが、やっぱり、自分のことにはなかなか気がつきません。自分の差別意識にはなかなか気がつきません。知らない間に誰かを傷つけています。踏みつけています。そういう弱さというのは、人と人とのつながり合い、語り合い、触れ合い、その関係性が豊かになっていく、その共感的つながりがきちんと機能していく、その中でしか気づかれていけないと思うんです。

「差別を教え込んだだけ」、そして、「押しつけの決意表明をさせただけ」、そういう、切ない同和教育の悲しい現実があったと思うんです。子どもたちの中に生きて働いていかなかった現実があったと思うんです。そのことが、小学校・中学校・高校と同和教育を受けてきてにもかかわらず、昨年度、今年度、非常に攻撃的な差別意識を持っている20代の若者に出会うんですね。なんとも言えない切ない思いをします。だからこそ、やっぱり、そこで出会った意味があるんです。

皆さんの中に、どんな思いが広がったですか？私に問われること、これが本当に私自身の問題で、私の家族の問題なんだ。そして、私自身がこんなに幸せになっていくんだ、そういう学習を、この後皆さんと共有できたらと思います。

3人の思いが溢れました。この思いを会場全体に広げていきたいと思います。大勢の中で語るというのはエネルギーがあります。だからこそ、そこに広がっていく感動があります。語った者にしかわからないよるこびなんです。それが、私が取り組んできた全体学習でした。

(会場を見渡しながら)…いかがでしょうか。こんな願い、こんな思いを持ちました。今日、話を聞いて、ビデオを観て、こんな思いが私の中に広がった。そういう、皆さん方の一人一人の具体的な事実を通して、共に学び合っていく。学習者が学習者を変えていく。そんな、これからの時間にしたいと思います。…いかがでしょうか。…挙手をお願いします。(間)この沈黙が何とも楽しいですね。ここから始まっていくんです。これが、さっと手が挙げたら、「サクラ」ですからね。(会場に笑い)違うんです。ここから自分との葛藤があるんです。後ろの方の方、見えますか？はい、いきましょ。…(会場の様子を見ながら)あの、後になったらマイクが回らないかもしれませんよ。…はい、お願いします。ちょっと強制しました。(笑い)

#### 《フロア 男性》

ええっと、まだちょっと言いたいことがまとまっていないので、うまく言えないかもしれないんですけど、

D君の友だちです。今日は、前にいる皆さん方の話を聞いて、自分が今までに体験したことを、ちょっと思い返してみました。

大学に入って、まだ半年経ってないんですけど、いろんな体験をさせてもらいました。大学の中に「人権について考えるサークル」というのが、まだ見つかっていないんですね。バイトとか、違うサークルに入っているようなことをしているんですけど、大学の入学の時からいきます。Bさんのハンセン病の話を聞いて思い出したんですけど、入試の面接の時に、「ハンセン病についてどう思いますか？」という質問を受けて、その時に、ちょうど熊本のホテルでハンセン病の人の宿泊拒否をしたという話がありました。

でも、その頃僕は、入試の勉強でテレビをほとんど見ていなかったんです。それで、そのことを知らなくて、面接官の人に聞いて、それに対する話をしたんですけど、ハンセン病に対する知識というのは、その時低かったと思います。部落問題については勉強してきていたけど、さっき、D君が言ったように、障がい者とか、こういうハンセン病の問題などに対する意識というのは低かったかもしれないということが、こういう場面でも出てきてしまったのではないかなと思いました。

また、D君が言った障がい者の事になるんですが、僕は、大学に入ってバイトをビヤガーデンでしていました。そこに来たお客さんで、一人で来たんですが、片腕のない人がいたんですね。実際、ビールを注ぐときには苦勞するはずですよ。それで、バイトしている人らから、「注いできて」と言われるんですけど、セルフなんですよ。そのビヤガーデンは、基本的に僕は動いてはいけない立場なんですけど、「ここはやっぱり行かなあかんかなあ」と思って、焼酎などを注ぎできました。1時間くらいバイトの先輩と話していたんですけど、やっぱり、何て言うか…「帰ってほしい」というのがありました。僕も、助けてほしいという時もあるし、こういう時は、もしかしたら、障がいのある人に助けられることもあるかもしれないということを、D君の介護の話を聞いて思いました。

ここから部落問題の話に入っていくんですけど、大学のサークルに入って、僕もウキウキしていました。サークルで自己紹介があって、そこの自己紹介で、「自分の出身地と名前を言う」というのがあったんです。そこで、僕は本当に何も知らなかった人なんですけど、その人と一緒にサークルに入って、自己紹介をしていたんですけど、本当に人権というようなサークルではなかったんですけど、そこで、「僕は、〇〇県の、〇〇という部落に生まれた〇〇です。」と言った子がいたんですけど、こういうところで、「僕は部落出身だ」と言ったその子をすごいと思いました。

そう思ったことにはわけがあるんですけど、さっき、Aさんがビデオでも言っていたように、バイトの先輩から出る差別発言というのは、非常にきついものがあります。僕も、これはつい最近の話なんですけど、9月1日に19歳は行ったらいけないんですけど、飲み会に行きました。その飲み会の席で、バイトの時間が早く終わったら食べ物を持って来てくれるような、優しい僕の大好きな先輩がいたんですけど、その先輩の過去について話をしていた、その先輩は、結構悪いこともいろいろしていたんですけど、そこで、ある子が「ほんと、あんたってたち悪いなあ」と言ったら、その先輩が、「俺もたち悪いけど、俺の島には、(ちょっと名前は出て来なかったんですけど)エッタというのがあって、そいつらは一人がやられたら、軍団で来るから、俺よりたち悪いぞ。」みたいなことを話したんです。

これを聞いた時に、大学のサークルに入った時に、「〇〇という部落に生まれた〇〇です。」と自己紹介した人がどんな気持ちでいたんだろうと、気になったんですけど、そう言ったバイトの先輩に対して、「たち悪いなあ」と言った子が、「エッタって、部落の事やろう」というようなことを言って、「ああ、そうやな」というような話が始まっていったんです。僕は、一応、「僕の友だちには、そういう子がおって、めっちゃええ子だ」という話はしたんですけど、やっぱり、1人というのは心細いという気持ちがありました。

いつもみたいに、ガンガンは言えなかったんですけど、そこでちょっとでも言えたのは、中学、高校の先生にいろいろ教えてもらったり、解放運動に参加したりして知識を得たことが、ちょっとでも自分の力になったのではないかなと思います。終わります。(拍手)

## 《コーディネーター A》

今、サラッと言われましたけど、耳を疑った人がたくさんおられると思います。こういう言葉がポンポンと出てくる状況に、20歳前後の子がいるということ、同年代の子からそういう言葉が出るということ、その中で、いろんな思いを噛みしめている子がおるとのこと。この事実です。

私たちのこの学びというのは、やっぱり、そういう「差別の現実に学んで」という原点を絶対に忘れてたらいかんと思うんです。そのことをきちっと検証し合いながら、「さあ、自分に何ができるか」ということを、今この場で確認し合いたいと思います。どう聞いたでしょうか。どう返しますか？いかがでしょうか。

## 《フロア 男性》

僕は、部落差別を受ける地域に生まれました。今は、故郷を離れて、母方の実家で農業経営をしています。僕の父親と母親が結婚する時に、父が部落出身ですごくゴタゴタがあったらしいんです。僕が生まれて、今、こうやってこういう会に参加させてもらっているわけなんですけど、やっぱり、差別があることで、地域の人だけでなくみんなが辛い思いというか、いろいろな人が、差別があることで辛いと考えているんですが……。僕は、自分が地区出身ということを知ったのは、小学校6年生の時に、親は、なかなかそういうことを教えてくれなくて、中学校1年生の時の家庭訪問で、A先生がうちに家庭訪問に来ていただいて、母親が、A先生との話から、僕が地区出身だということを知っていると気づいた時に、涙をぼろぼろ流したことや、中学の時に僕の家で差別電話がかかってきたことがあったんですけど、いろいろすごい差別発言を電話の向こうで言われて、これを親父に言ったら、3日くらい仕事を休んで寝込んでしまいました。

やっぱり今でも、こうやって普通に生活はしていますが、自分が閉鎖的な所で仕事をしていて、友だちから聞いたりとか、近所の人とも話をしている、軽いはずみで差別発言が出た時に、自分の事もそうだし、親の事もそうだし、友だちや先生や、今まで出会ってきた仲間がおる。その顔がいっぱい浮かんでくるんですよ。

僕は、自分が地区出身ということを知った時に、「もっとちゃんと頑張ろう」と思ったんですけど、ごっつい卑屈になる時もあります。「差別には負けん」と思って生活しているんですけど、部落差別とか、同和問題に対して、面倒くさいと思っている人がいると思うんです。やっぱり、まだまだ差別意識が心の中から離れない人がよおけるんですけど、こういう人の前で、「自分は同和地区に生まれました」と言ったら、こういう人らは、いったい、こう僕が語ったことについてどう思ってくれとるのかなあということはあるんです。

今日の、「人権地域フォーラム」のテーマが「ひとごとからわがことへ」、わがことを考えようというようなことを書いてあって、これを読んだ時に、僕は今、こうやって前で話をさせてもらってるんですけど、「差別はなくならん」と言われたり、難しい問題なんですけど、自分の周りだけでも、みんなで楽しく自分の気持ちとかを語る仲間をつくっていきたいなあと思って、これでも今頑張っていきたいなつもりなんです。

今日は、「自分は同和地区に生まれたという話を、差別意識を持っている人が聞いたたらどんな感じに思うかなあ」とか、「まあ、別にどうでもいいか」と、どうでもいいことで止まっているのかなあ、頭の中、心の中で思ってしまいました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

前の方の若い子が2人語ってくれました。本当にここにはたくさんの方がおられるわけで、やっぱり、みんなが自分のことを言っていかなければ、雰囲気は変わらないし、力がわいて来ないと思うんですね。「私がこの場の雰囲気をつくっていくんだ」という、「私の学習なんだ」という、「私に問われているんだ」というところで、みんなが生き生きと自分のことを表現しだした時に、私たちの職場というのは、私たちの地域



社会というのは、私たちの教室というのは、すごく素敵な場になっていくんだと思うんです。

現実には厳しいです。2人の語りを皆さんどう聞かれたでしょうか。壇上の3人がウズウズしていますけど、またこれは発言を保証しますので、是非、フロアから発言を頂いて、みんなで考えていきたいと思います。…いかがでしょうか。はい、ではお願いします。

## 《フロア 男性》

板野町から来ました。前の皆さんにはいろいろお世話になっていきますので、一言発言をしたいと思います。

Bさんにつきましては、2年前ですか、部落解放人権教育研究集会で、私が司会者で、Bさんが会場から何度となく発言をして、助けていただいています。今日は、私がお返しに、何か話をしようかなという気持ちです。パネラーの皆さんも、会場から発言された方も、非常に話が上手であったので、私が下手な話をし、後の話がしやすいように、是非とも解放していきたいと思います。

いろいろ思うところがありますし、私自身が被差別部落に生まれて、今、35歳になるんですけど、生きてきた中で、パネラーの発言と重なるところもたくさんあります。私自身もハンセン病療養所の方と交流会をしたこともあります。

結婚差別の話とか、いろいろ話したいことはあるんですけども、一点だけ話させていただきたいのは、今、前のパネラーから、また、会場からからの意見でも明らかになりましたように、いまだに、部落差別は存在しているということなんです。この実態は残念ながら変わっていません。

私が20代くらいの時は、私自身の問題でしたが、今、35歳になりましたので、中学生の子どもと、小学生と幼稚園に行っている子どもがいるんですが、その子どもたちがどうなっていくのかというような年代になっております。

差別は現実にあって、特に結婚の事に関しては、いまだに根強い差別があるというのが明らかです。そういう社会が存在しているのに、具体的に板野町で申しますと、板野町では数年前ですが、江嶋修作先生にお願いして、住民の意識調査を行いました。その中で、具体的な数字は覚えておりませんが、例えば、地区外住民の方が、世間話をするような近所の人と集まった時に、いったいどんな会話がなされるのかというようなパーセンテージが示されておりますが、その中で、「部落の話をする」というのが、確か7割前後という割合が出ておたと、私は記憶しております。

ですから、「こういった会話の中身は何ですか？」と問うと、実は、先ほどあったように、「部落のものは交通事故の時、集団でやってくる。」であるとか、「ガラが悪い。」とかいう話しがほとんどを占めているというふうに思っております。ということは、法律が切れて、部落差別解消のための施策がどんどんカットされ、終わりを迎えます。

けれども、一方で、ずっと連続して強力な力で、残念ながら部落差別は再生産され続けている。こういう現実があるわけです。私は、子どもが同和地区対象学習会に参加しております、県の方に、3年間、ずっと「地区学習会を存続させてほしい」と取り組んできたんです。この、学習会というのは、学力の保証もありますし、仲間づくりですね。前の青年の皆さんもそうだったと思うんですが、もし差別に出会った時、いくら知識があったとしても、やっぱり仲間がいなければ、そこでもしかしたら命を奪われてしまったかもしれません。

けれども、そこに仲間が存在するし、その青年たちには、A先生という素晴らしい人がいたというところに守られていたのかもしれない。そういう場として学習会が存続しておったんです。守ってきておったんです。

また、社会的立場の自覚ということで、親の立場からすると、なかなか子どもに「あなたは、実は、差別を受ける立場の地域に生まれてきたんだ」という話をしづらいですよ。自分自身は、高校生の頃から、こういう解放運動に関わり始めていますが、自分がそこに入っていくというのは、それはきつくないんです。私は

きつくありませんでした。

けれど、親になって子どもに伝えていくというのは、きついんです。子どもには、保護者自身がなかなか話せないんです。これは反省なんです、地域で保護者をバックアップしていけるような形になっていけませんので、学習会にそのあたりを助けていただいていたんです。

私が言いたいのは、それも、今法律が切れて、3年間ということで学習会が続いてきましたが、今の学習会というのは、来年(2005年)の3月31日で終わってしまいます。何度となく、県とも交渉、陳情を繰り返しているんですが、これは明らかで、揺るぎがないというふうに言われております。一方で厳しい差別の現実がありながら、一方で、もう法律がなくなったからこういった制度はやめていくと言う。

そこに議論があったんですが、いくら県の財政が苦しくても、市町村の財政が苦しくても、「基本的人権」にかかわる部分、「人の命」にかかわる部分を、そう簡単に、コスト論で、「お金がないからやめてくれでいいんですか？」と話をしたんです。言っているかどうかわからないんですが、そこで県側の言ったのは、「現時点ではすべて見直す。地域がつくるということからすると、基本的人権についても、コスト論を適応せざるを得ない」というような話でした。

これは、県が悪いというのではなく、私が今思っているのは、民間サイドでも、官公庁を含めて、全てコストで話をしていくという中で、例えば、この部分は差別を強化していくんかなと、私自身認識をしております。そういう所で、学習会を存続させてほしいという保護者の強い願いも、県とか、それぞれの自治体の財政状況が厳しいという中で、差別という実態があって、差別が再生産させているということが明らかでありながら、終わっていかざるを得ないという所はいっぱいあります。

話がうまくまとまりませんから、とりあえず、そういうことを話させていただきました。(拍手)

## 《フロア 男性》

今日のテーマが、『ひとごと』から『わがこと』へ、そういうキーワードでございますので、こういう「わがこと」として考える場で、「国民的課題」ということが同和教育、人権教育で叫ばれていますけど、「国の責務」、「地方公共団体の責務」「国民的課題」であると言っている、一般市民がどうするかということを実際に考えていかなければと思います。

前から、パネラーの方々も、涙ながらに訴えられたことに対し、私たちは、本当にきちんと目を凝らし考えていけば、この人権の問題が自分の問題として考えていけるのではないだろうかと思えます。同和教育のこういう研修をしていますが、堂々めぐり。らせん状的な県民意識、国民的意識は変わらないと思います。ということで、私もあえて発言したようなことでございます。(拍手)

## 《コーディネーター A》

どうもありがとうございます。私は具体的な事実の積み上げだと思います。その中で、自分というものが見えてくるんです。共感的つながりのない中で、生きた学習にはならないです。態度とか実践にはならないです。今日、200人くらいの参加があります。全員の発言を求めるわけにはいかないんです。でも、「やっぱりこのことを伝えたい」という立場に立ち切るかどうかということです。後でアンケートを書いていただくわけですが、この中に、皆さんの具体的な事実を是非書いていただきたいと思います。そのことを通して、この取り組みをより生きたものにしていきたいんです。

私の中にこんな事実がある。こんな切なさがある。でも、こういうふう生きてきた。差別はあかん、でもここからだ。このことを皆さんに提起したい。それを私たちが返していく。そういう、人間のつながりをつくっていく日常を私たちがつかんで行く、そんな時間にしたいと思います。

言葉というのは人を殺します。でも、言葉というのは人を生かします。本当に人を生かし合う、そういう語り合いの時間を共有したいと思います。いかがでしょうか。

## 《フロア 男性》

こういう場でしゃべれることをうれしく思います。私のことなんですけど、私はA先生の教え子で、中学校でいろいろ教えてもらいました。自分を見た時に、仲間と一緒にいろんなものを見て、いろんな意見を聞いて、いろいろ考えてきました。

中学、高校と進み、進学しないで就職したんですが、自分の中で、「自分がしっかりしないからこうなる」というところもあって、あかんなあと思うところもありますし、ちょっと意志の弱いところもあって、会社の中で部落差別もありました。自分も軽いんですけど、ちょっかい出されても、ケンカをするところまでいったらいいんですけど、段々精神的に追い込まれて行って、手首も切りました。こんな自分は見たことないと思うくらい、中学校であれだけ同和問題学習をやっているのに、こういう状況になりました。

自分の心の中と照らし合わせて話してみても、自分の中でこういう自分がおるんだなあ気づいた時は、すごい辛かった。かっこいいことでも何でもありません。ダサイです。この8月31日で退職しました。ここで踏ん張ったんですが、結構かかりましたので逃げました。

ここで自分を支えてくれる人が周りにおって、一緒に考えてくれる人がおって、仲間がおって、僕を心配してくれて、力になってくれて、顔を見ただけで生きる力が出ました。一緒に支えてくれる人もいます。

そんな中で、自分はもう引き戻せないし、このまま前に進んでいくしかないです。一歩でもいい、前に進んでいきたいと今は思っています。生きとってよかったなあとは今では思っています。こんなに大事な人たちと出会えたことも誇りです。

やっぱり、会社とかはいろんな人が集まって、皆さん僕より先輩の方ばかりなので、よくわかっていると思うんですけど、どんなことがあったって、差別やいじめはいっぱいあります。僕が高校の時、3年で就職に決めました。それまで、進学の手続きできていたんですけど、いろいろな事情があって就職しました。

企業の求人を見て、僕、そのとき「高校生の会」とかに行くと、僕は地区外ですけど、「全国青年集会」の実行委員とかさせていただいたりして、いろいろすごいことを体験させてもらいました。そういう自分があるって、部落問題学習、人権問題学習について取り組んだ部分があることで気づきがありまして、これをみて、「ああ、こういうこともあるんだと思いました。

企業側からも、親父が企業に勤めていて、企業を見たりしまして、取り組んだこともあると聞いていました。実際親父と話をして、親父は相当差別していました。それでケンカをしたこともあります。いがみ合って口をきかなかったこともあります。こういうことをしよる部分もあるんだなと思いました。

人間は、生まれた時、赤ちゃんの時は温かいものを持っています。誰も絶対に持っています。それが育っていく環境でいろいろなものを見て、いろいろなことを聞いて育って、大人になっていく。つまり、こういう判断を間違っている部分はいっぱいあると思うし、あかんなあと思うこともいっぱいあります。だけど、こういうことが気づききっかけになればいいなあと思います。こうやって、人はつながっていけるとか、ここでちょっと話ができることが、そういうきっかけになるかもしれません。

自分は、自分の会社に勤めていて、上の人から、「もうええけ…。」ええ言葉です。自分の心の中にも、本当の部分は、「自分みたいな年下の者が、考えてちょっかい出したりして…。」「あんたら、何を教えてるんや。子どもに…。」って思いました。「あんたらを見て育つ部分もあるんだよ。こうやってやっていることは恥ずかしいことないかなあ。」と思いました。「お前ら、何言ってるんや。」っていう感じでした。こういう上司にはなりたくないなと思います。

社会に出て、現実がたくさん見えて勉強になりました。だけど、こういう自分を糧としてこれから生きていきます。もう後ろを向きません。前しか見ません。

こういう場で出会うことができたとしても、組織です。考えません。自分には関係ないと思っています。こういう人たちがちょっとずつでも変わっていき、そうしたら、一緒にやることができるし、いい環境と

かできるし、もっともっと支え合って、この人たちがいるから企業が動いてお金が出てくる。社長とか経営する人がいて、雇ってくれる人がいるから働いている部分がある。実際、こういう人がいてくれなければ会社はまわりません。営業の人が回って仕事を取って来て、働いてものができていく。これはどの職場でも言えると思います。

こうして、みんなでチームワークをもっていろいろできる環境を、今日、企業の偉い人がおられるのであれば、見直してほしいと思います。そうやって苦しんでいる者のいることも考えてほしい。陰で苦しい思いをしている者がいます。絶対います。そこから背を向けたらいい会社もできないし、いい製品も生まれてこないと思います。みんなで生き生き働ける場所になっていけたらと思います。

今、就職難で大変な時期ですが、ここから変えていくことは1回ではできないと思います。僕も含めて、みんなが生き生きと働ける場をつくっていくのは自分でもあるし、皆さんでもあるし、みんなにできることもあるし、みんなの力でいい職場をつくっていけたらと思います。こうやって僕が話したことが、何かのきっかけになればと思います。ちょっとでも心に残ってもらえたらと思います。(拍手)

### 《コーディネーター A》

ありがとうございます。今日の23歳の青年の叫びをどう聞いたのでしょうか。やっぱり、それを糧に具体化していきたいし、この思いを私たちの職場に生かしていきたいと思います。社会に返していきたいと思います。後、2人くらい意見を頂けたらと思いますけど…じゃあ、後ろの方、1，2，3の順番でお願いします。

### 《フロア 女性》

私は大学院に通っています。今日、ここへ遅れてきたので、この遅れてきた私が何か話ができるかなと思ったんですが、自分の仲間が話しているのを見て。「ああ、私も話せるな」と思いました。テーマが『ひとごと』から『わがこと』へ」というキーワードがあるみたいなのですが、自分の差別意識を話すのは本当に苦しくて、もう涙が出そうなんです。

私は、中学校の時のA先生の教え子なんですけど、中学時代から部落問題学習をずっとやってきて、どこかで、「自分は差別しない」と思っていました。でも、私は知的障害のある人とスポーツをするボランティアをしているんですけど、大学4年の時に、そういう関わりの中から、卒論にそのことを書こうと進めていく中で、「知的な発達障害のある人」ということをテーマにしていたんですけど、そういう中で、自分の勉強不足もあるんですが、自分の差別意識をまざまざと見せつけられる場面と出会いました。

私は、「障がいのある人の兄弟姉妹」をテーマにしたんですけど、私がとても仲のいい友だちに、「障がい」のあるお兄さんがいる子がいました。私はその子のことが大好きで、ずっと友だちなんですけど、自分の差別意識がまざまざと見せつけられてくる中で、私は、彼女に対して、常々どんなに彼女を傷つけていたか、自分の差別意識に気づけていないことの恐ろしさを感じました。

本当に苦しくて、でも、実は、彼女にまだこの思いを何も伝えられていなくて、本当に苦しい思いをしてきて、この、自分の差別意識を誰かに言いたいと思っても、そんなことを話せる人は大学にはいません。だから、こういう場で、自分の仲間が話していて、この場でみんなに聞いてもらえたら、また一歩前に進めるのではないかなと思って発言しました。(拍手)

### 《フロア 女性》

大学1年です。A先生とは高校の時に知り合いになったんですけど、鳥取から来ています。私自身地区出身なので、小学校・中学校・高校といろんなことをしてきました。私自身は、差別されたというような経験は特になんていんですけど、それなりに活動していたので思いはいっぱい持っています。

話すのは得意ではないんですけど、こういう場に来ると、「どうしても今日話したい」とウズウズしてし

まって話をさせてもらっています。今現在の私の話をしようと思います。小学校・中学校・高校と活動してきたんですけど、大学に来てこれという活動をしていません。今、大事にしたい友だちがいるんですけど、その子たちに自分が地区出身だということを言っていないです。

実は、今日も講義があったんですけど、それを休んでここに来ているんですけど、鳥取から来ている私が、講義をサボってまで鳴門に用事があるなんて、友だちはすごく不思議がっているわけなんです。この前、徳島で「全国青年集会」があって、鳥取県連のみんなも来たんですけど、やっぱり講義があった時で行けなくて、鳥取の仲間の飲み会に出てみんなに顔を見せようと思って、夜だけ交流の場に出ました。

その時にも、友だちが遊ぼうと言ってくれたけど、「飲み会があるから」と言った時に、「え？誰と？」って言われました。その時にも、知り合いがいないはずなのによって、不思議がられました。大事にしたい友だちに、自分は地区出身だと言いたくてたまらなくなるんですけど、言えないで、今までできました。

鳥取の中では、初対面の人にも何も思わずに、「自分は同和地区出身だ」と言っていたり、仲間もいっぱいいて、高校でも活動していたし、強気でできたんですけど、ここに来て大学の中にいると、友だちが出身の県もバラバラで、どんな勉強してきたのかもわからないし、言ったからどうこうなるようなことはないと思うんですけど、言えないままです。

ここでいろんな人の話を聞いていたら、帰ったら、その子たちに自分のことが言いたくなかった自分ができるかなと思って、自分に勇気をつけるためにも発言させてもらいました。(拍手)

### 《フロア 女性》

こんにちは。私は結婚する前に鳴門市に出ました。鳴門市っていうのは、もちろん学校では部落問題をやるんですけど、そんなに熱心にしていないというか、そんな感じです。私も母親なんですけど、地区外から結婚して地区の人間になりました。

その子だったら部落の子になるんですけど、親バカなんですけど、かわいくて仕方がないんです。寝ているところを見ていると、「ああ、こんなにかわいい顔をしているのに、将来差別を受けるのかなあ」「結婚する時に断られるのかなあ」って、最近思うことがあります。

でも、言い方がおかしいんですけど、部落の子が産めてよかったなあって思います。差別はなくさないかんけど、部落の伝統っていうのは残して行ってほしいと思うので、その伝統とか文化を残していける子を産んで本当によかったと思います。

今日、ここに来ていらっしゃる方は、先輩の方が多いので、お子さんとかお孫さんとかいらっしゃると思うんですけど、時間があれば、どういうふうにその子に伝えていくのか教えてもらいたかったんですけど、また、次の機会に教えていただきたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

### 《コーディネーター A》

是非、また話をしてやってください。はい、どうぞ。

### 《フロア 男性》

企業内にもいじめや差別に実態があるので、企業内で差別落書きも見つけたことがあるんですけど、僕はすごく怒りがこみあげてきて、何ていうんだろう、腹が立って、これについて辛いとかいうのはなかったんですけど、ここで闘って、「あいつ、あんなことを言いはるわ」と思われるのが怖いと思ったんです。

自分は企業で食べていかないかんわけですし、妻や子もおるんで、やっていかなあかんと思った時に、今日のテーマ『ひとごと』から『わがこと』へ」と思った時に、「わがこと」だから我慢しなければいけないんだろうかと思ったりしています。なんだろう……。

僕の勤めているのは、でかい企業ではないけれど、今日受付をして、大きな企業の方も来られとったので、

その企業の中で、人権の問題についてどう取り組めばいいのか、知っておられたらそのことについて教えてほしいと思います。

上の人ではわからんようなことを、実際、下の者は苦しんで闘っていると思います。ここに企業の方もたくさん来ておられると思うんですけど、会社の役目として仕方なくここに来ておられるんだったら、こういう機会があるので、少しでもいいので「こういうことを、下の者が思うんだ」ということを思ってもらえたら、多分企業としても成り立っていくだろうし、儲かるだろうし、給料も上がるだろうし、そんなことを思っただけで大事にしながら、僕自体もわからんけど、僕ら下の者も必死だから、上の人にも考えてもらえたら、ええなあ(笑)なんて思っています。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。時間も来ていますので、これで終わりたいと思います。(フロアから、語りたいた手が挙がる)…はい、じゃあ…どうぞ。

#### 《フロア 女性》

すみません。発言するつもりはなかったんですけど、Dの母です。こういうところでどんな発言をするのかとドキドキしながら聞いていたんですけど、さっき、Tさんの話を聞いて、これはちょっと話をさせてもらいたいなあと思いました。

私も結婚差別に出会って、いろいろあった中で周りに支えてくれる仲間や先生があって、結婚式が挙げられました。私も揺れました。両方の親せきも寄って結婚式が挙げられまして、そんな中で、結婚前に子どもができた時に、「それでええんか」と言われたんですけど、私が結婚を決めた時に、やっぱり、この同和教育の素晴らしさ、「心を解放する、本当に素晴らしい生き方ができるなあ」ということを本当に感じるものがあったんです。

それで、子どもができた時に、「このことは子どもに伝えよう。そうしたら、子どもも後悔するとか、親を恨むとか、そういうことはないだろうな」と思って、そういうふうで育てたいと思って、この子を育ててきました。

その中で、やっぱり「親の口から同和地区だということを伝えよう」ということで、私たちの仲間、地域の仲間が、月に2回くらいという形で勉強を続けているんですけど、「自分の口から子どもにちゃんと伝える親になろう」ということで、頑張っています。やっぱり、どうしても頑張らなければならないことだと思って、頑張っています。また頑張りましょう。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

時間が来ていますので、これで終わらせていただきます。本当に答えが出ません。やっぱりこの学習を、それぞれの企業の研修や、それぞれの職場での取り組みに絶対つなげてください。この、心震わせて身体全体で語ってくれた言葉を心に刻んで、私たちの営み、本当に自分がこんなにキラキラできるという営みを頑張ってくつっていきたいと思います。

アンケートを配らせていただきました。是非、書いてください。下敷きもなく書きづらいんですけど、シャープペンシルだけ配っています。袋から出して書いていただけたらと思います。すみません、発言の保障もできませんでした。本当にいい加減な進行になりました。

本当にこの仲間の思いを受けとっていただけたらと思います。皆さんとその思いを共有できたらと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

終了